

令和5年度 第3回石狩市教育委員会叢書発刊編集委員会 議事録

要約筆記

■日時：令和6年2月15日（木）13時30分～15時00分

■場所：石狩市民図書館 視聴覚ホール

■出席者：下記表のとおり

委員		事務局	
役職	氏名	所属	氏名
委員長	田岡 克介	生涯学習部市民図書館館長	伊藤 学志
委員	石橋 孝夫	生涯学習部市民図書館副館長	岩城 千恵
委員	村山 耀一	生涯学習部市民図書館主査	高木 順平
委員	三島 照子	生涯学習部市民図書館主任	吉岡 律子
委員	志賀 健司		
委員	工藤 義衛		

次第1 開会

【田岡委員長】

- ・ 本日は、お足元の悪いところお集まりいただきましてありがとうございます。ご存じのとおり、第3巻の発刊作業が進行しており、本日の委員会で最終的な確認を行う段階までできました。皆さんには、今までご苦勞をいただきましてありがとうございました。
- ・ 次第に沿って事務局より説明をお願いします。

次第2 報告 (1)石狩叢書第3巻の進捗状況について

【事務局（高木）】

- ・ それでは、次第に沿って説明させていただきます。
- ・ 石狩叢書第3巻の完成稿データは1月31日に編集業者から納品され、事務局にて修正漏れが無いことを確認した上で2月4日に委員の皆さんへ、また、執筆者へお届けしております。
- ・ 2月13日には印刷業務を発注しており、3月下旬には完成品が図書館に納品予定です。納品され次第、委員の皆さんへお届けするとともに発刊のプレスリリースを行います。第2巻の発刊時と同様に図書館喫茶コーナー、市役所4階福利厚生会、石狩観光協会、道の駅石狩「あいろーど厚田」にて販売予定です。本日は、参考までに周知用のポスターも資料としてお配りしています。
- ・ 第3巻の贈呈につきましては、道内図書館、市内学校・学校図書館、道内主要新聞社・テレビ局、友好図書館等に1冊ずつ、執筆者様には2冊ずつお届けする予定です。

【田岡委員長】

- ・ 今の説明について質問などありますか。

【志賀委員】

- ・ これまで道内全ての図書館に配布していましたか。

【事務局（高木）】

- ・ 主要な図書館に配布しています。

【志賀委員】

- ・ もし冊数に余裕があれば、近隣の札幌市や小樽市の博物館にも贈呈できれば良いと思います。

【田岡委員長】

- ・ 事務局と志賀委員とで打ち合わせをして、必要などころには贈呈するようにしてください。

次第3 議題 (1)石狩叢書第3巻の販売価格について

【事務局（高木）】

- ・ それでは、議題へ移ります。本日の議題は、「石狩叢書第3巻の販売価格について」、「次巻のテーマについて」の2つとなっております。
- ・ まず、「(1)石狩叢書第3巻の販売価格について」を事務局から説明させていただきます。
- ・ 石狩叢書第3巻の価格については、発刊にかかった経費や読者が手に取りやすい価格帯などを総合的に勘案し、決めていきたいと考えております。
- ・ 参考までに1冊あたりの発刊経費について、説明させていただきます。第1巻の発刊経費は税込1,663円。これを税込1,000円で販売しています。第2巻の発刊経費は税込1,619円。これを税込1,000円で販売しています。第3巻の発刊経費は税込2,165円となっております。発刊経費の積算方法については、謝金、編集業務委託費、印刷製本費の合計額を発刊部数で割り返した額となっております。なお、第1巻の販売価格を決める際には、近隣市町村の叢書の価格を参考としつつ、読者が手に取りやすい価格を勘案し、販売価格税込1,000円とした経緯があるとの記録があります。
- ・ 図書館としては発刊経費も踏まえ、1冊2,000円での販売価格を提案の一つとして考えたのですが、皆さんのご意見をいただきたく思います。

【田岡委員長】

- ・ ざっくばらんに話して、2,000円は高いのではないのでしょうか。

【三島委員】

- ・ 第1、2巻も赤字ですよ。赤字のお金はどこで補填されるのでしょうか。赤字のままですか？

【事務局（高木）】

- ・ 赤字のままです。

【工藤委員】

- ・ 第3巻の販売価格2,000円というのは、掛かった経費ほぼそのままということですか。

【事務局（高木）】

- ・ そうです。

【田岡委員長】

- ・ 第1、2巻の1,000円というのは、少しでも多くの方に読んで欲しいという願いを込めた販売価格です。しかし、今回はフルカラー印刷になり原価も2,000円を超えたので、相応のアップ分を

みてはどうでしょうかと、意見を述べ合うきっかけとして事務局が提案されたと思います。

- ・ 2,000円ですと専門家の人たちは買ってくれると思いますが、読んでもらいたいまちの人たちの購入しやすい価格か、と言うとどうでしょうか。買いつらいでしょうね。
- ・ 市が発行しているという観点から、今回の第3巻も1,000円というのはありでしょうし、物価高騰のあおりを受けて、また、カラーも多いので1,500円ではどうかという議論もあるでしょう。発刊の経費ではなく皆が買いやすく、だからといって前と同じ価格で良いのかなど、何が正解ということではなく、ざっくばらんな議論を当委員会で行って欲しいと思います。

【志賀委員】

- ・ 質問ですが第3巻のページ数を教えてください。

【事務局（高木）】

- ・ 約260ページです。

【志賀委員】

- ・ 第1、2巻が160ページ程度ですね。では、単純に2,000円というのはそれでも割安ですね。ただし、一般の感覚として本の厚さが1.5倍になったとしても、2,000円では抵抗があります。

【工藤委員】

- ・ 2,000円ということは、発刊経費ほぼそのままということですよ。そうすると、この本については読みたい人が発刊経費をそのまま自己負担するということになります。市は発刊経費を全く負担しないということになりますね。

【事務局（高木）】

- ・ その辺は、これまでの第1、2巻販売の経緯もありますし、勘案しようという話になっていると思います。

【田岡委員長】

- ・ 市の財政課から値上げをするように言われているのですか。

【事務局（高木）】

- ・ 今のところ、そのような議論にはなっておりません。

【村山委員】

- ・ 第3巻を2,000円にしてしまうと、次の第4巻以降がどうなるのか不安です。第3巻はカラー印刷やページ数が多いこと、物価高騰を勘案して1,500円くらいに抑えてはいかがでしょうか。もし将来、販売価格が2,000円となった場合、都度様々な事柄を鑑み、検討した上で価格を決定しているとご理解いただけるのではないのでしょうか。

【工藤委員】

- ・ 今回はページ数が増えているので、ページ数が少ないものより高くなるということは理解できますが、単価としてはどうなのでしょう。第1、2巻のページ単価を掛けてみるという方法もありますね。

【三島委員】

- ・ 今回はカラーが増えているので、ページ単価では計算できないと思います。

【石橋委員】

- ・ 第3巻目の当初予算は、260ページの本を制作できる金額だったのでしょうか。

【事務局（高木）】

- ・ 当初予算では不足したため、予算の流用手続きを行った上で対応しています。

【三島委員】

- ・ 普通は当初予算に合わせて制作しませんか。

【事務局（高木）】

- ・ 今回13名の執筆者から原稿をいただいでいく中で、当初よりもページ数が増加した経緯があります。しかし、原稿の内容がとても良いものでしたので原稿を削ることをせず、発刊できるように予算を調整しました。

【石橋委員】

- ・ 予算に見合わないものは成立しないのではないのでしょうか。

【田岡委員長】

- ・ 基本的にそうだと思います。

【事務局（岩城副館長）】

- ・ 発刊費用につきましては、令和4年度と同じ額を組んでいます。そして、今回は皆さんが仰ったとおりカラーページが多いこと、ページ数自体も多いこと、印刷部数を800部としたことで必要額が増加しました。予算を超過した分につきましては、他の予算から流用する手続きを行い、発刊に至っています。

【石橋委員】

- ・ 普通は予算内で制作するものです。今回はたまたま流用できる予算があったという話ですね。

【三島委員】

- ・ 原稿はともかく、カラーの写真数を少なくするなどして、少しでも予算内に近づける方法を取らないのですか。

【事務局（岩城副館長）】

- ・ 先ほど担当者からも申し上げましたように、第3巻は13人の著者にご協力をいただき、とても良い叢書を発刊することができそうだという見通しがあったこと、子どもにも大人にも読みやすくなりたいという思いもありました。更に、分かりやすくするため、章ごとに差し込みページを入れた経緯もあり、当初予算を超過しました。

【田岡委員長】

- ・ 予算は制作する前年度に積算していますね。どのような内容の本になるか、何ページになるかがその時点では確定していませんので、前年度の実績を拠り所として予算化しているのですね。
- ・ 不用額を出すほどの予算を組まず、最小限としていることから、少しページ数が増加すると予算の調整が必要になるということですね。普通、増額する場合は補正予算になりますが、財源があったため、流用したということですね。

【事務局（岩城副館長）】

- ・ 流用できる予算があり、補正予算を組むほどの増額にはならなかったこと、また、著者の皆様の原稿が素晴らしく、良い叢書を見やすいものを作りたいということで、カラーも多数入れております。

【田岡委員長】

- ・ 普通、市で本を制作するときは当初予算の範囲内で、100万なら100万、150万なら150万で執行します。
- ・ 販売額は雑入として全然違う会計の収入に入るのが普通のやり方ですよ。この販売価格はどこに入るのですか。

【事務局（岩城副館長）】

- ・ 図書館にはなく、市の歳入として一括で収入されます。

【三島委員】

- ・ 第1、2巻もそれだけの赤字を出して発刊しているのだから、2,000円ではなくて1,500円くらいで販売するというところでどうでしょう。

【事務局（岩城副館長）】

- ・ 赤字と言いましても、例えば市では様々なパンフレットなどを作っておりますが、無料配布となっております。

【田岡委員長】

- ・ 企業会計ではありませんので、赤字という発想にはなりません。コスト主義ではなく、1,000円をベースにして、買い手の買いやすい価格を当委員会の中で決めていきたいと思えます。
- ・ 今回は第1、2巻に対して経費が多く掛かっていますので多少の値上げは考えられると思えます。

【事務局（岩城副館長）】

- ・ 第1、2巻の発刊時と比べ、現在は物価が上がっておりますし、用紙代も上がっておりますので、若干の値上げも考えられるかと思えます。

【田岡委員長】

- ・ そうだと思います。

【石橋委員】

- ・ このような予算の形であれば、今後はどうなるのですか。

【事務局（岩城副館長）】

- ・ 来年度の予算は、しっかりとついております。

【石橋委員】

- ・ 普通は予算に見合った発刊をするものであり、売上で超過した金額を穴埋めできるなら良いのですが、そうではないのでしたら事務局も予算を超過しないように調整すべきだと思います。

【田岡委員長】

- ・ 軌道修正が必要な部分はありますね。ある程度今年中に本の概要を作って次年度へ向けた予算要求をしないと、やりくりも大変だと思います。事務局の苦勞も分かります。

【事務局（岩城副館長）】

- ・ 予算要求時、次年度に発刊する本の概要をしっかりと固めておく場合、スケジュール感が難しくなると思えます。毎年10～11月が次年度の予算要求時期になりますが、その時にはページ数やカラーの枚数、印刷部数などを細かく決めておく必要があります。

【田岡委員長】

- ・ 予算要求時、次年度の本のページ数やカラーページの割合など完全に確定することは難しいと

と思いますが、予算の範囲内で原稿を作る必要があります。

【事務局（岩城副館長）】

- ・ 事務局としましては叢書の目的を踏まえ、良いものを作りたいと考えております。小学校の高学年から手に取っていただけるような読みやすいものを考えますと、写真や図の入ったカラーページも必要になってきますし、今回、13名の執筆者にご尽力をいただいて、とても良い叢書ができたと思っております。面白い内容になっておりますので、多くの方に手に取っていただきたいと思った時、印刷部数も700部ではなくて800部が必要ではないかと考えました。これらの状況から予算が不足したのは確かですので、第4巻以降につきましては今回のような流用手続きを行わず、当初予算どおりに発刊したいと思いますのですが、よろしいでしょうか。

【田岡委員長】

- ・ そこは一度、交通整理をした方が良くもありませんね。来年度の予算要求の時期は終わっているのに直ちにとというのは難しいと思いますが。
- ・ それでは、第3巻の販売価格を決めたいと思います。どうでしょうか、1,500円は高いでしょうか。

【三島委員】

- ・ 最近の本の値段は、ハードカバーなど上がっていても1冊2,800円とかでしょうかね。3,000円まではいっていないと思います。

【田岡委員長】

- ・ ところで1,000円だったら問題はありますでしょうか。

【三島委員】

- ・ 今回はカラー印刷ですから、1,000円は安すぎるかと思えます。

【志賀委員】

- ・ 第1、2巻は1,000円で販売しているので、本の厚さが1.5倍くらいになって同じ値段だと、今後発刊する本も1,000円ということになりますね。

【三島委員】

- ・ そうですよ。今までは数枚カラーページは入っていましたが、基本的に白黒印刷でした。

【志賀委員】

- ・ ページ数が1.5倍なので厚さも1.5倍ですかね。

【工藤委員】

- ・ 1,000円のもの比べてボリュームも1.5倍になったから価格も1.5倍というようにすべきです。しっかりとした根拠が無い中で1,500円とか、1,400円という議論はどうなのでしょう。

【事務局（高木）】

- ・ 第1、2巻の発刊経費が1冊あたり1,600円です。今回は2,100円なので500円程度上がっています。その分を増額して、1,500円というのはいかがでしょうか。

【工藤委員】

- ・ 販売額について問われた際、そのように何らかの根拠があった方が良いです。あとは1,500円が良いのか、1,480円が良いのかという話はあると思います。更には細かい話ですが、購入する際、お釣りが出ることを考えると1,500円でスパッと切るのも一つの手かと思えます。

【三島委員】

- ・ では、1,500円が良いと思います。

【工藤委員】

- ・ 1,500円で手が伸びるかな、ということであれば良いのではないのでしょうか。

【事務局（岩城副館長）】

- ・ 本を開き、中を見ていただけたら手が伸びるのではないのでしょうか。

【三島委員】

- ・ カラーで花の写真も出てきますし、差し込みページもあります。本を開いてみて買って欲しいですね。

【事務局（高木）】

- ・ 手に取って、中を見ていただく方はいらっしゃると思います。

【三島委員】

- ・ 新聞に掲載する際、カラーがふんだんに掲載されていることや、1.5倍のボリュームになっていることを是非、伝えて欲しいと思います。

【志賀委員】

- ・ 厚さが1.5倍だから値段も1.5倍というのは、買う方も納得しやすいと思います。1,500円の方が何百円というお釣りも出ませんので、買う方も販売する店の方も良いと思います。

【工藤委員】

- ・ あとは値ごろ感があるかですね。1,500円というのは個人的には良いところかなと思います。

【田岡委員長】

- ・ それでは、みなさん1,500円にしたいと思いますが、いかがでしょうか。

【複数の委員】

- ・ 良いと思います。

【田岡委員長】

- ・ それでは、1,500円をお願いします。

次第3 議題 (2)次巻のテーマについて

【田岡委員長】

- ・ それでは、次の議題「次巻のテーマ」について、事務局より考え方や方向性がありましたら、発言をお願いします。

【事務局（高木）】

- ・ それでは、「石狩叢書第4巻のテーマについて」を皆さんと考えていきたいと思います。
- ・ 第1巻は吉岡玉吉さんの資料を編集した「私の体験したサケ漁」、第2巻は田岡委員長に執筆していただきました「鮭の鱗」、第3巻は叢書で幅広い分野を取り扱うことで、「石狩海岸の自然誌」となりました。
- ・ 今後の石狩叢書の発刊見通しにつきましては、令和5年3月に皆さんにお知らせした文書を本日添付しております。第1巻発刊から10年後の令和13年度までの発刊を目途としておりますが、発刊のタイミングは2年で1冊を基本とし、テーマによっては柔軟に期間を設定することとしています。

- ・ 今までの経緯をご説明させていただきました。以上につきまして、よろしくお願ひいたします。

【田岡委員長】

- ・ 皆さん、いかがでしょうか。具体的なテーマ案や執筆を依頼する人などのアイデアは今のところ無いんですね。次回の委員会で具体性を固めて叩き台をつくり、調整を進めていくということではいかがでしょうか。
- ・ また、第4巻を発刊するという方向で良いでしょうか。もし、今回の第3巻が完成した時点で叢書の発刊を終了するという選択肢、編集委員会のメンバーを変えるかどうか、そういうことも含め、少し時間を置いてから当委員会で話し合いませんか。

【石橋委員】

- ・ 事務局は、今後も叢書の発刊事業を続けていきたいのでしょうか。

【事務局（高木）】

- ・ 発刊する意味はとても大きいと思います。

【石橋委員】

- ・ 叢書のテーマは、イメージとしてどのようなものが良いと思っていますか。事務局であってもそういうイメージをもって取組まないと、なかなかこのような事業を継続することは難しいと思います。

【三島委員】

- ・ 今回第3巻を発刊できましたけれど、私は何十年も図書館に出入りしていますが叢書が図書館の担当になり、大変だったと思います。

【田岡委員長】

- ・ 図書館として、この事業の役割をどう考えるかが大事ではないかと思っています。そして、これまでの叢書第3巻までの発刊をどう評価しているのかが重要です。市は今後、文化事業として継続していきたいのでしょうか。
- ・ 他のまちではどういった部署が担当しているのでしょうか。民間団体でしょうか。

【工藤委員】

- ・ 別に編集組織をつくって担当しています。市誌編纂室のようなところで担当しているところもあれば、それに取組む事務局という形もありますね。

【田岡委員長】

- ・ 他の図書館では、そもそも本を発刊する事業はあまりやっていないものなのではないでしょうか。

【工藤委員】

- ・ 北海道立図書館では、昭和30～40年代に郷土資料集のようなものを継続して発行していましたが、おそらくレファレンス業務の延長線上で行っていたものではないかと思われます。
- ・ あとは、市町村レベルでやっているところは、編纂室の様な組織が担当している場合が多いです。図書館や博物館が片手間でやるというのはなかなか難しいと思います。

【三島委員】

- ・ 編纂室には職員は配置されているのですか。

【工藤委員】

- ・ 僅かにいます。知識がある方が委嘱されて担当しています。

【田岡委員長】

- ・ 石狩市の市誌はまさにその方法でした。嘱託職員を配置しました。

【三島委員】

- ・ そうですね。そのように対応しないと発刊できないですね。

【工藤委員】

- ・ 図書館司書や、事務職員が片手間で担当するのはなかなか難しいと思います。

【三島委員】

- ・ このような形ではできないのでしょうか。

【工藤委員】

- ・ あまりそのような体制で発刊しているところはないような気がします。中にはあるかもしれませんが、釧路市の叢書は完全に別だったと思います。

【三島委員】

- ・ 今のところ2年に1冊を発刊する計画ですが、3年に1冊というペースも考えられると思います。

【田岡委員長】

- ・ 負担感は同じだと思います。平常業務にプラスアルファの仕事が入ってくるという負担感があります。

【事務局（岩城副館長）】

- ・ 担当者は大変でしたが、今回本当に良い本ができたと思っています。

【田岡委員長】

- ・ そういう満足感はあると思うんですね。完成した本に愛着も沸くと思います。最初は海のものとも山のものとも分からない中、自分の事務経験として全く知らない仕事を経験し、実際に本を手にした方が喜んだ時、それはまた違う感覚が生まれると思います。

【事務局（岩城副館長）】

- ・ 皆さんのお陰で本当に良い本ができたと思っております。志賀委員には執筆者のご紹介や全体的な企画のサポートなどをしていただき、大変助かりました。

【田岡委員長】

- ・ 専門的な仕事については専門職員がフォローし、対応するのが現実的です。
- ・ 石狩市の現状からすると、郷土研究会が叢書の編集を請け負えるかといったら、私は難しいかなと思います。
- ・ 今後、叢書発刊を継続するのかもしれないのか、という話について今日ここで結論を出すのは勿体ない気がします。第3巻の印刷が終わってから、改めて話し合いませんか。やめるという結論が一番簡単です。

【三島委員】

- ・ 発刊するとなったらテーマについて、案を出さないといけませんね。

【田岡委員長】

- ・ テーマを考えないとダメなんですよ。合わせて職員の負担も考えなければいけません。

【事務局（岩城副館長）】

- ・ この2年間叢書業務を担当して分かったのですが、執筆者が決まれば業務も比較的スムーズに

進みやすいのではないかと思います。執筆者の選定が大変であり、その点、今回は志賀委員が助けてくださったことで、スムーズに進みました。執筆者が決まらなければ、いつまで経っても進行させることはできず、テーマを決める際は執筆者を誰にするかも合わせて考えないといけないということが理解できました。

【三島委員】

- ・ ちょうど今、国際交流協会が資料を集めているところなので、頼みやすいかなと思います。

【志賀委員】

- ・ その話は、国際交流協会で原稿があるから、それを叢書として発刊しようということでしょうか。

【三島委員】

- ・ いえ、違います。内容が叢書にちょうど良いのではないかとということです。

【石橋委員】

- ・ それは叢書の趣旨とは違うのではないのでしょうか。

【志賀委員】

- ・ その内容は国際交流協会が出すべき資料であり、叢書としては違うように思います。

【三島委員】

- ・ それでは、どのようなテーマを提案すれば良いのでしょうか。
- ・ 資料館では考古学を何十年も調査して、その都度研究発表の資料は公表されています。それらを網羅した一冊を叢書として発刊しても良いと思います。

【石橋委員】

- ・ それは資料館で出すべきものと思います。

【田岡委員長】

- ・ 基本的には、叢書のために原稿を書き下ろしたものにしたいと思います。

【石橋委員】

- ・ 大昔の石狩の話で1冊をつくるのであれば、それは叢書のテーマとしては考えられると思います。

【三島委員】

- ・ それでは、テーマと執筆者を合わせて考えながら作っていくということで、テーマは次回の委員会で話し合うということで良いのではないのでしょうか。

【田岡委員長】

- ・ こんな人に、こんなテーマで書いてもらいたいという案がありましたら、事務局へ報告して欲しいと思います。
- ・ そもそも第4巻を発刊するのかもしれないのかという話ですが、発刊するという方向でよろしいでしょうか。もう一度、皆さんで話し合いませんか。

【三島委員】

- ・ 発刊した方が良くと思います。ここで途切れたら、何も無くなってしまいます。

【事務局（岩城副館長）】

- ・ 是非、引き続き発刊したいと思います。

【志賀委員】

- ・ 叢書は内容をしっかりと作ることができれば良い企画だと思います。是非、続けていければと思います。

【田岡委員長】

- ・ 事業内容としては、事務局を担当する嘱託職員を図書館に一人配置するくらい、分量の多い業務だと思います。職員が本当に大変です。この事業を市はどのように評価しているのでしょうか。叢書を作るというチャンスはなかなかありません。作ることができるメンバーが集まった時がチャンスだと思いますし、でき上がるとやってみて良かった、読んで面白かったという話が結構あるものです。
- ・ 館長に出席していただいています。館長から嘱託職員の配置の話を進めていただけませんかでしょうか。

【事務局（伊藤館長）】

- ・ 今、図書館で叢書の発刊業務を担っており、第3巻という良い作品を市民の皆さんにお届けできることは図書館としても大変ありがたく、委員の皆様には感謝しています。
- ・ これからも未来へ、子ども達も含めて伝えていくべきものがあるのであれば、本という形にしていく作業というのは必要ですし、図書館としても地域資料を残していくという意味では、叢書の発刊を担っていくべきものであると思っています。
- ・ 人員体制につきましては、市役所なので当然人事異動はありますので、その体制の中でやっていくしかないと思っています。ただし、新たな業務やプロジェクトができたのでその分として、一人増員をお願いしますとか、嘱託職員をお願いしますというのであれば、人事協議の中で話をするようになるのですけれども、第3巻から第4巻に継続するという中で、なぜ人を増員するのかという明確な理由が必要と感じています。

【田岡委員長】

- ・ やってみた結果、人員の増員が必要であると分かったと言う話をすれば良いのではないのでしょうか。

【事務局（伊藤館長）】

- ・ 当然、そのような議論もありますが、今の人員で第3巻を発刊できたよねと言われれば、それまでです。今後の作業の中で体制の増員が必要であれば、人事や財政へ話をしていく考えはもちろん持っています。ただ、今の時点では嘱託職員が一人必要だという明確な根拠が、僕としてはまだ無いのかなと思っています。このため、現時点で増員するという考えは持っていません。

【三島委員】

- ・ 第1、2巻がどういう状態で作られたか理解していますか。
- ・ 第1巻は殆ど吉岡玉吉さんがつくった原稿を叢書に、第2巻は田岡さんがつくった原稿を叢書にして、第3巻がようやく図書館で最初から作り上げたものになります。
- ・ 執筆者も決まっておらず、志賀委員がとても力を入れてくれたからでき上がったんです。それが無ければ、もし初めからテーマを決めていこうとなったら、本当に大変だったと思います。

【事務局（伊藤館長）】

- ・ 先ほど副館長が言ったように、テーマを決める上では執筆者も合わせて一緒に考えていかない

と進まないのだと思います。

【三島委員】

- ・ 今の職員体制では、大変ではないかという話をしています。

【事務局（伊藤館長）】

- ・ これが事務局で執筆者もテーマも決めるとなったら、無理だと思います。

【三島委員】

- ・ 館長のお力で嘱託職員を増員できないものですか。第3巻から、職員が大変な思いをして取り組んでいます。

【事務局（伊藤館長）】

- ・ 嘱託職員の話についてはこれから部長等にも情報を伝え、相談していきたいと思っています。ただ、現状としては難しい状況であると認識しています。

【田岡委員長】

- ・ その辺については館長に努力をしていただきたいと思います。とりあえず、今日のところは発刊をやめるという結論は出さず、それぞれがテーマを考えることにしましょう。また来るべき時に少し具体的な話ができそうなタイミングを見て、ご相談をしたいと思っています。

【石橋委員】

- ・ 事務局の方からテーマについて提案していただけないでしょうか。積極的に提案してもらっても良いんじゃないかなと思います。

【三島委員】

- ・ 石橋さん、前回の委員会で、石狩で動いていた人の事典というテーマを提案されていませんでしたでしょうか。

【石橋委員】

- ・ 事務局からこういう分野のテーマが良いかなというくらいのイメージは出してもらった方が、話の叩き台になると思います。新しい方向から提案してもらおうと議論になるのではないかと思います。
- ・ 吉岡さん、そういうイメージはありませんか。

【事務局（吉岡）】

- ・ まず、叢書を第3巻まで発刊していただいた感想を言わせていただきたかったのが、館長も言ったとおり、子どもたちへ石狩に関わるものを残していく機会が少ないと思っていました。現在、皆さんのお力添えをいただけるというのがとても良い機会であると考えており、残すべきテーマはまだきっとあるんだろうなど、個人的には思っています。
- ・ 第1、2巻が鮭に関するテーマだったので、石狩川下流の河口地域に関するものがあれば良いのではないかと考えていました。ただ、石狩川に関する本は沢山出版されておりますので、石狩市らしい内容にするためにはどういう切り口がいいのか、また執筆者を誰にするのが難しいかと思っていました。

【田岡委員長】

- ・ 戦後に開拓に入った頃の人で存命の方は、もうそんなにはいません。最後のチャンスという意味では、生々しい話を聞き取って原稿に起こせるのは今のタイミングしかないかもしれませんね。

【志賀委員】

- ・ 今後10年間で7巻を発刊するとして、今まで第3巻まで出版し、残りは4巻ですから石狩叢書として扱うべきテーマを厳選する必要があります。
- ・ 私が考えているアイデアだけのものをいくつか言っておきますと、吉岡さんの言っていた石狩川はとても良いと思います。石狩川の下流、河口付近に限定すると石狩市内の状況になります。そこに、色々な分野、生物、地学だけではなく、自然、歴史とか、漁業とか、多方面から書いていくというのは面白いと思います。あと、少々課題はありますが、石狩油田について色々な方面から書いてみるのも良いかもしれません。それから、例えば黄金山。黄金山はそれ自体、自然でも歴史でもありますが、それだけではボリュームが足りないということであれば、他の石狩の山も少しずつ足していって一つの本にすることも考えられます。

【村山委員】

- ・ 以前、人物のテーマ案で村山家が出てきましたけれども、これ一つで一冊というのは難しいと思います。今回の第3巻は素晴らしい内容で、そして書いた方が沢山いるのに文章の立て方も同じで、読み手からすると本当に読みやすいと思います。村山家のことだけでは難しい。そこで石狩に関わる人物、荒井金助、佐藤松太郎、金子清一郎、飯尾圓什など、石狩の中で重要な人物を一冊にすると書きやすく、表しやすいですし、人物編として一冊になると思います。
- ・ もう一つは、資料館で博物誌や石狩ファイルなどを作っていますけれど、そこには歴史的な物が色々出てきますよね。博物誌からピックアップした一冊が作れないのかなというのが、今考えた思い付きです。
- ・ 今、志賀委員が言われたのにプラスすると、岡崎文吉も出てきますから石狩川治水に関することも含めると良いです。子ども達や将来に残したいということからすると、自然や治水の歴史を残していきたいと思います。こういうヴィジョンを考えていかないと、思いが段々曖昧になってくると思います。残り4巻のテーマを多めに立てていた方が取扱いやすく、予算も取りやすく、人選もしやすいと思います。

【田岡委員長】

- ・ テーマに関する提案が多数ありましたので、次の会で方向性を出したいと思います。
- ・ 胸の内には皆さん色々なことを思っているようです。石狩叢書には不思議なこともありますし、大変だなどという感謝の気持ちもあります。色々ありますが、やってみるとそれなりに楽しかったと思えるような仕事の仕方をみんなで苦勞を重ねながらしていきましょう。
- ・ ついでにお話をしますが、三島さんが整理してくれた田中さんの資料の中で、田中さんの原稿も結構ありましたよね。

【三島委員】

- ・ 田中さんの原稿は、田中さんが色々なところへ寄稿したものを保存してあったものです。既に世間に発表されているものです。
- ・ 先ほど石狩の人物を書いたらどうかというお話がありましたが、田中さんも人物事典のようなものを出したいと思っていたようで、資料を沢山集めていました。この資料から、1～2年ではなく、4～5年かけてゆっくりと拾っていくことはできるかもしれませんね。

【村山委員】

- ・ 提案ですけど、田中さんの資料に石狩に関わる人物が一覧表になったものがありました。叢書

の後ろの方にこれを付けるというのも良いかと思えます。

【三島委員】

- ・ 田中さんの資料の中に、油田に関するものも一箱ありました。茨戸油田や厚田油田、五の沢油田のものもありました。今後、叢書のテーマとして取り上げることができるか検討したら良いと思います。

【田岡委員長】

- ・ それでは本日は長時間に渡り、ありがとうございました。

令和 6 年 9 月 12 日

会議録署名委員

委員長

